

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

|         |              |
|---------|--------------|
| 氏名      | 田 春娟         |
| 学位      | 博士(文学)       |
| 学位記番号   | 新大院博(文)第49号  |
| 学位授与の日付 | 平成26年3月24日   |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 博士論文名   | 漢詩人としての阪口五峰  |

|        |       |       |
|--------|-------|-------|
| 論文審査委員 | 主査教授  | 佐々木 充 |
|        | 副査准教授 | 岡村 浩  |
|        | 副査准教授 | 廣部 俊也 |

## 博士論文の要旨

本論文は、阪口五峰の漢詩人像を明らかにすることを目的としたものである。構成は以下の通り。

第一章 五峰と漢学・漢詩及び初期の詩

第二章 森春濤・茉莉吟社との関わり及びその門下としての五峰の詩

第三章 森春濤没後の五峰及びその詩

附1 明治漢詩壇とかかわりのある吟社、雑誌リスト及び掲載詩作目録

附2 『新潟才人詩』全二集について

附3 『五峰遺稿』目次

本論文は五峰の漢詩文集『五峰遺稿』の他、『新文詩』、『新詩府』、『新詩綜』などの雑誌に掲載された五峰の詩も取り上げ、訓読・注釈・和訳を行いつつ、生涯にわたる詩風の変化を分析し、五峰の全体的詩人像について論じている。

第一章は、初期一七首の詩すべてを対象として分析している。「出門」という若書きの詩から始まり、歴史に取材した雄渾かつ優雅な詩風を呈する詩があり、議論を積み重ねた剛健な詩風を示す政治に関する作があるとともに、江戸時代後期の柏木如亭や晩唐の杜牧の詩語を取り入れ、五峰なりの水郷新潟の風土を艶麗に醸し出した「竹枝」詩も作っている。また、季節の変化に対する繊細な感覚を表す詩や、船で急流を下るのをダイナミックに描写した詩も作る等、初期の詩では様々な傾向・詩形の詩作を試みていることを明らかにしている。

第二章では、森春濤門下としての五峰の漢詩三四首（七言律詩一七首、七言絶句一二首、七言古詩一首、五言絶句二首、五言古詩二首）を対象として、この期間における五峰の詩作、詩風について論じている。第一節では、『新文詩』に投稿する前の、新潟の風月吟社の重鎮である詩友丸岡南陔への送別詩が筆致流麗な詩風を呈していることを論じている。次に、五峰の『新文詩』へのデビューとなる七言絶句について検討し、この詩が劉禹錫の語彙を取り入れ、白居易の水郷描写も参照した竹枝詩であることを明らかにしている。第二節、第三節、第四節では、

森春濤からの五峰への清詩の影響について論じている。五峰は春濤の教えを尊重しつつも、春濤が称揚する清詩については、春濤の価値判断よりも自らの取捨に従い、袁枚の性靈詩説を重んじる詩を書いていることを明らかにしている。また、春濤と知り合った後、春濤が得意とした竹枝風の詩を書いているが、春濤の艶体詩のような詩作は殆ど見られず、むしろ清代の神韻派的詩風を呈していることを明らかにしている。また、清代の「性靈」詩派の詩人の作風を、そのまますべてを受け入れているわけではなく、自分と共通する傾向の詩人に注目し、自分なりの取捨選択を行い、その結果、五峰なりの詩風を形成していることを明らかにしている。第五節では、五峰の「禪」についての詩を考察し、五峰の禪への関心は、春濤が艶体詩で表現している「美人禪」といった表現の「禪」とは異なり、嚴羽の『滄浪詩話』に見られるような、詩禪一致の境地を求めていたことを明らかにしている。

第三章では、『五峰遺稿』の詩や『新詩綜』の詩など、二七首（七言律詩一二首、七言絶句一二首、七言古詩二首、五言古詩一首）の詩を対象として、森春濤没後の五峰の詩風を五節にわたって明らかにしている。第一節では、十首の五峰の詩を取り上げ、五峰の「廢詩」前後の詩風の変化をたどりつつ、「憂愁」を表現した詩を分析し、この時期では、花鳥風月的詩作をよしとせず、国家の安危を憂える士大夫的傾向を呈していることや、宋詩との関わりについても追究している。第二節では、五峰の「憂」・「愁」という字が用いられている詩七首を取り上げ、五峰の個人的「愁」から士大夫的「憂」への心理的变化を明らかにしている。さらに五峰の文人趣味を表す「印癖」に関する七言古詩一首を通し、「廢詩」前の七言古詩の雄渾と違う繊細な詩風を呈していることを示し、五峰の詩作が円熟の域に達したことを明らかにしている。第三節では、五峰が衆議院議員になってから戦場視察の詩を作るなど、時事的な作詩を行っていることや、「読史」という五言古詩では、五峰の平易さと雄渾な氣勢と議論的氣質がうかがえることを明らかにしている。第四節では、五峰が生涯に渡って添削を繰り返した竹に関する詩五首について分析し、実生活では政治家として多忙であった阪口五峰が、漢詩人としては、その竹の詩において少しずつ表現を変えながらも、隠逸生活に対する憧憬を、約二〇年間にわたって一貫して表現し続けたことを明らかにしている。第五節では以上論じてきたことに基づき、五峰の詩が全体としては「文人」の詩というよりも「士大夫」的詩の様相を呈していることを明らかにしている。

猶、付録として五峰の漢詩についての資料を整理したものを載せているが、これは今後の五峰の漢詩研究の基礎的資料となるものである。

#### 審査結果の要旨

本論文は坂口安吾の父であり、新潟県における政治家・文人として知られた阪口五峰の漢詩の詳細にして緻密な分析を通して、五峰の漢詩人像を明らかにしようとしたものである。阪口五峰が漢詩人であったことは良く知られた事実であるが、その詩に関しては、五峰の没後に編集された唯一の漢詩集である『五峰遺稿』への全体的注釈・解説が存在しておらず、その漢詩人としての全貌はこれまでほとんど明らかにされてこなかった。本論文は五峰の詩を森春濤との関係を基礎にして三期に分け、それぞれの時期の詩の代表的なものを取り上げ、その訓読を行い、詳細な

典故についての注釈を付し、現代日本語に訳し、五峰の生涯と照らし合わせた内容解説を施し、中国や日本のこれまでの漢詩との影響関係を調べ、それぞれの詩の詩風とその変化を明らかにするという綿密な作業によって五峰詩の全体像を明らかにしたものである。

本論文はこのような形で五峰詩の研究における基礎を築くとともに、五峰詩の全体像を明らかにした力作であり、阪口五峰の漢詩研究にとって画期的な研究であると評価することができる。

また、本論文は阪口五峰の漢詩を対象とした文学に特化した論文であることから、博士（文学）の学位にふさわしいものである。

以上のことから、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。